

埼玉

戦後80年

語り継ぐ ⑤

平和の祈り 歌に乗せて

戦争の記憶を歌い続けようとする人たちがいる。平和への思いをメロディーに乗せ、二度と戦争を起こさないよう、世代を超えて誓い合う。

■「広島 愛の川」

「爆発といっしょに 広島市のいたるところに 放射能

をまきちらしていたのだ。昨年12月、さいたま市大宮区の大宮ソニックシティで開かれたコンサート。漫画「はだしのゲン」の作者・中沢啓治さん(2012年死去)が作詞した「広島 愛の川」を、歌手の加藤登紀子さん(81)が朗読した。一緒にステージに

立ち、バックコーラスを務めたのは、さいたま市中央区で子ども食堂を運営する「みな風地域食堂」のメンバー約50人だ。

約1700人の観客の前に緊張した顔の人。感情が高ぶる涙する人。思いのこもったハミングがホールに響いた。同食堂代表の山田ちづ子さん(75)は「広島情景が脳裏に浮かんだ。胸がいっぱいになった」と振り返った。

同食堂では、虐待を受けた若者の声を紹介する映画作りを支援した。この映画の主題歌を加藤さんが歌っていたことから、交流が始まり、今回のコンサートへの出演が決まったという。

■伝える義務

山田さんは沖縄・石垣島の出身。父の安室孫芳さん(94年)に84歳で死去。は、軍医としてフィリピンに派遣された。最前線で生き延びたものの、沖縄戦で父を亡くした孫芳さんは普段、戦争の話をすることがなかったという。山田さんは結婚を経て、さ



加藤さんのコンサートでバックコーラスを務める「みな風地域食堂」のメンバーら(昨年12月20日、トキコ・プランニング提供)

「はだしのゲン」作者の詩 合唱

いたま市で古民家カフェを開いた。料理を振る舞い、陶芸やガラス作品などの展示を通して、沖縄文化を発信する。沖縄戦の記録映画の上映も続けている。6月23日の「沖縄慰霊の日」には戦跡を巡るツアーを実施したこともあった。

「戦争を知らない世代がほとんどの現代で、沖縄で育った私には戦争の悲惨さを伝えていく義務がある」。その決意が原動力となってい



2023年7月に開かれた「川口ぞうれっしゃ合唱団」のコンサート(荒木さん提供)

る。

■子どもたちの希望

合唱組曲「ぞうれっしゃがやってきた」は全11章、約40分にわたる大作だ。名古屋市東山動物園では戦争中、当時の園長らが体を張って動物たちを守り、飼っていたゾウのうち2頭が生き残った。戦後、「ゾウを見たい」という子どもたちを乗せた臨時列車が走った実話が、セリフを交えて歌われる。

「地元の川口で、命や平和の大切さを歌いたい」。川口市の主婦荒木紀理子さん(69)らが呼びかけて、1990年に結成されたのが「川口ぞうれっしゃ合唱団」だ。以来、30年以上にわたって歌い続けている。

これまでに15回のコンサートを開いた。「暗い話しかなかった戦後に、子どもたちが抱いた希望がこの歌には詰まっている」。歌うたびに荒木さんはこの歌が持つ力を感じている。

メンバーはコンサートごとに募集する。今回は3歳から94歳までの約1700人が集まった。学生、会社員、医療関係者など経歴は様々だ。6月22日に埼玉会館(さいたま市浦和区)で開くコンサートに向けて、練習が続いている。(宮川徹也)